



第3回

# モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2009年2月8日(日)

◆開演◆ 14:30 ◆

会場：深志教育会館

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

共催：長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭

後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会

信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団

## よこしまかつと

大旅行中のモーツァルト一家、初のシンフォニーを書いたモーツァルトのロンドン滞在。モーツァルト一家が過ごした当時のイギリスでヴォルフガングは何を見、何を聞き、何を感じてロンドンを後にしたのだろうか。ロンドンで書かれたとされる3曲はわずか8歳、9歳のときの作品。

第3回目となる今回の全曲演奏会、初期シンフォニー・ロンドン・シリーズ最終回です。

## モーツァルトにとってのロンドン

18世紀のイギリスは大陸の音楽家たちを熱狂的に受け入れ、彼らに法外な報酬を与える国として知られていた。この世紀の初め、マッテヰンはその状況を次のように描いている。「今日、音楽の分野で何かしら事をなそうと思う者はイギリスに渡る。イタリアとフランスでは、音楽がよく聴かれ、学ばれている。イギリスでは音楽で稼ぐことができる。しかし、わがドイツでは、せいぜいのところ、音楽は消費されているにすぎない」。モーツァルト一家がちょうどロンドンを訪れていた頃、サミュエル・シャープはイタリア人音楽家にこうアドバイスしている。「【イタリア人音楽家は】分別があるならば、きっとイギリスに行くことだろう。どのような才能であれ、そこではナポリで得られる金額の約10倍の報酬を得るのだから」。ヨーゼフ・ハイドンがお金になる仕事でロンドンを訪れたときも、状況は同じだった。「数多くの外国人の歌手、ヴァイオリン奏者、舞踏家たちが、ここで突拍子もない収入を得ている。彼らが多少とも儉約家であれば、仕事をやめて故郷へと戻り、イギリスで得たお金で、裕福に暮らすことができるだろう」。

そしてロンドンから父レーオポルトはザルツブルグ宛の手紙の中で「これまでにいろいろな宮廷で物凄い歓迎を受けてまいりましたが、当地(ロンドン)の歓迎振りはそれどころではありません」。

7歳から始まったこの大旅行をしている間に、モーツァルトという雛鳥は作曲家として急成長をとげた。旅に出るときはナンネルの音楽帳にあるピアノの小曲を書く程度であったのが、数多くのヴァイオリンやフルートの伴奏つきのピアノ・ソナタをはじめとして、旅の終りの頃にはオーケストラ音楽を書くようになり、その中にはシンフォニーや寄せ集めのセレナード【ガリマティアス・ムーシクム】KV32までが含まれている。伴奏つきの4セットのピアノソナタ集はモーツァルトの最初の出版物として刊行もされている。

モーツァルトはロンドンで主流となっていた、王室付作曲家ヨハーン・クリスティアン・バッハやカール・フリードリヒ・アーベルらのシンフォニーを模した曲を書いて、自分の音楽会の開始と終了の音楽として使ったが、少年の書いた曲はまた、これらの作曲家たちが行っていた有名な音楽会のシリーズでも演奏されていたかもしれない。すなわちシンフォニー、変ホ長調 KV16(第1回全曲演奏会)、二長調 KV19(第2回全曲演奏会)、(今回演奏する)へ長調 KV19aなどで、すべてロンドンで作曲されている。「なんと私は忙しいことでしょう。今度の音楽会で使うシンフォニーはすべてヴォルフガング・モーツァルトの作品です。私は自分で写譜しなければなりません。でないとい枚につき一リングも取られてしまうのです」と、1765年2月21日の音楽会の支度をしながらレーオポルトがザルツブルグ宛に手紙に書いている。

## モーツァルト一家の旅行はどんな様子？

レーオポルトは生まれつきのケチではあったが、旅行の費用は惜しまなかった。その理由の一部は、自分たちを良く見せようというものである。「私たちの健康のためにも、私の仕える宮廷の評判を落とさないためにも、私たちは貴顕紳士の身なりで旅せねばなりません」とレーオポルトは説明している。衣装といい、生活のスタイルといい、モーツァルト家は、貴族でもあるかのように急速に変貌を上げていったが、その様子は当時描かれた一家の肖像画をみるとよくわかる。そしてこんな事も言っている。「私たちは貴族や身分の高い方たち以外とは近づきになりません。そして特別に丁寧な待遇をうけています」

しかし病気と死の危険とは常に一家の旅の道ずれであった。1765年の秋（今回演奏するKV22をその後作曲）にはデン・ハーグでヴォルフガング少年は死神と袖ふれあっている。

そしてこの長い旅の終わりを姉ナンネルは自分のノートに、「一七六六年十一月の終わりに、三年半の旅を終えて、家族は元気に無事にザルツブルグに戻った」と書いている。しかしレーオポルトは一家がザルツブルグに戻ってから10ヶ月も経たないうちに、モーツァルト家の全員は自家用馬車に乗り、ザルツブルグをあとにし、ウィーンに向かうことになる。

レーオポルトはザルツブルグの友人、ハーゲナウアー宛てに当時のイギリス人の生活を報告していて、大変興味深い。「たしかにここはたえず暑気と寒気とが交替していて、危険な国です。・・・なん日もはなはだしい暑さです。たった今、北風が吹きはじめ、それから十五分もすれば異常な寒さとなります。・・・ただ食物は滋養分がありすぎ、それにいろいろな種類があるビールは、まったくびっくりするほど強くて、おいしいのです。・・・紅茶釜が一日中火にかけてあり、訪問の際には、みんな紅茶とバター・パン、つまりたいそう薄く切って、バターを塗ったパンが出されます。おまけに昼食は二時から三時のあいだで、夜はたいいてい人はなんにも食べないか、それとも、たとえばチーズ、バターにパンだけしか食わず、それに強いビールを大きいジョッキで一杯味わうのです」。

モーツァルトは、イギリス滞在中に、最初の声楽曲を作曲している。モテット『神はわれらの避け所』（KV20）がそれである。レーオポルトはこの曲ならびにその他のモーツァルトの自筆の楽譜を加えて、パリおよびロンドンで出版したソナタ集、さらに一家の肖像画をたずさえて、子供たちと大英博物館を訪問し、それらを寄贈したのであった。これらは現在でもなお、大英博物館の貴重なコレクションを形づくっている。大英博物館からは、次のような礼状がレーオポルトに渡されている。

「モーツァルト殿。私は大英博物館管財人常任委員会から、委員会が、過日貴下が委員会に対しておこなわれました。貴下のまことに利発であられる御子息の音楽作品の御恵贈を受領した旨、貴下にお伝えするよう、また貴下にこのことについての委員会の謝意を申し述べるよう命じられました。

## PROGRAM NOTE

- 交響曲 ヘ長調 Sinfonie in F dur KV19a  
(9歳 1765年か1766年 ロンドンかデン・ハーグで作曲)  
Allegro assai, Andante, Presto

1765年2月21日と3月11日のロンドンで、またはバッハ＝アーベルのいくつかのコンサートで、ヴォルフガングのどのシンフォニーが演奏されたのかは、いまだに謎である。順に見ていこう。ナンネルが「最初のシンフォニー」と呼ぶ失われた作品はおそらく《ロンドン練習帳》にある鍵盤用の楽曲か、他のなんらかの作品と関係があったと想像される。K16bとK17は、もはやヴォルフガングの作品とは見なされておらず、ケッヘル第6版その他で、レーオポルトの作品としてリストアップされている。近年再発見されたK16aはロンドンとは何の関係もない。

K18はアーベルが作曲したシンフォニーである。ただしスコアを書きオーケストレーションを修正したのは、間違いなくヴォルフガングである。K19b(たぶん包み紙に書かれたハ長調、第2回全曲演奏会プログラムノートを参照)がロンドンとどのような関係があるのかは、当の作品が発見されないかぎり、判断できない。他に5曲のシンフォニーがいまだに発見されずにいる。したがって現存する作品の中でロンドンのコンサートで演奏された可能性がある作品はKV16、KV19、そして今回演奏するKV19aの3曲と考えられている。

- 交響曲 第5番 変ロ長調 Sinfonie in B dur KV22  
(9歳 1765年12月 デン・ハーグで作曲)  
\*Allegro, Andante, Molto Allegro

デン・ハーグで行なわれた2つのオーケストラ・コンサートの2回目までに、ヴォルフガングはこの新しい作品を完成させていた。レーオポルトによるスコアの上部に次のような書き込みがある。「シンフォニア/ヴォルフガング・モーツァルト作/デン・ハーグにて、一七六五年十二月」。多くのモーツァルト伝記作者たちがこの作品をヴィレム5世のオランダ王即位式と関連付けてきた。しかし現在研究が進み、この機会に演奏されたのはおそらく他の作品であり、KV22は、翌年の1月22日の公開コンサートのために作られたと考えられている。

\*モーツァルトは1楽章の速度表示を書いていない。

## ●交響曲 第18番 ヘ長調 Sinfonie in F dur KV130

(16歳 1772年5月 ザルツブルグで作曲)

Allegro, Andantino grazioso, Menuetto-Trio, Molto Allegro

## 独特の音色

多くの作品が生まれたこの年、ヴォルフガングは交響曲を7曲を、そのうち3曲を5月に集中して作曲している。彼はこの作品の自筆譜に「シンフォニア Sinfonia」とのみ書き込んだ。そこにレーオボルトが「騎士ヴォルフガング・アマデーオ:モーツァルト作/ザルツブルグにて、一七七二年五月」と書き込んでいる。このシンフォニーは独特の音色を持っている。その原因の一つは、彼のシンフォニーには珍しい調性(交響曲52曲中、ヘ長調は今回の2曲を含めわずかに6曲のみ)の使用であり、もう一つは、オーボエの代わりにフルートを用いて、より高い音域を吹かせていることである。またC管アルト・ホルンとF管ホルンのペアで二組使用していることも、独特の音色に寄与している。

## &lt;ホルン&gt;

モーツァルトは習慣通りF管ホルン一組を念頭に置いて第1楽章に着手し、第2楽章アンダンティーノを書き進めた。しかしメヌエットに達するまでに、もう一組のホルンを書き加える決心をする。ホルンの名手、イグナーツ・ロイトゲープがヨーロッパ・ツアーからザルツブルグに戻ってきたことが、変更を決心させたのかも知れない。モーツァルトが通常2本ではなく、ホルン4本を編成に入れた作品は、シンフォニーにはわずかに5曲であり、これが最初の作品となる。

## ●ヴァイオリン協奏曲 第1番 変ロ長調

Konzert in B für Violine und Orchester KV207

(17歳 1773年4月14日 ザルツブルグで作曲)

\*\*Allegro Moderato, Adagio, Presto

成立年代が研究され、1775年から1773年に修正された。KV207は《ピアノ協奏曲二長調、KV175》(第2回全曲演奏会で演奏)に先んずることになり、現存するものとしてはモーツァルトにとって最初のオリジナルな協奏曲ということになる。この協奏曲が書かれたきっかけは、おそらくモーツァルト以外のザルツブルグのヴァイオリン奏者たちが演奏するためだったと思われるが、モーツァルト自身によっても演奏されたことは知られている。

\*\*モーツァルトは1楽章の速度表示を書いていない。